

六月の梅雨空は一旦落ち着きを見せたが、吉住春香が家を出ようと準備した所で、またパラパラと小雨が降りだした。

「あー、やっぱり、降ってきたー」

ムスツとした表情をしながら、傘立てから自分の傘を取り出す。

「お姉ちゃん、こんな天気の良い日に、どこ行くの？」

弟の高雄が玄関先まで降りてきていて、回答に困る質問を投げ掛けてきた。

なんでもいいじゃん、と答えると、直ぐに親に言いに行くし、本当のことを言っても、内容次第では、やはり親に言いに行く。

どちらにしても、高雄に納得させる答えが必要だ。

しかし、時間があまり無い事にも憂慮しなければいけない。

一番納得させるのは、「ああ、今日発売の本を買いに行くの」「敢えて」「お母さんにいつといて」

こう切り出せば納得する筈である。

「ふーん、気をつけてね」少し疑念を持ちながらも、納得したようだ。

「ありがと。じゃー行ってくるね」

若干、慌てて外に出たので躓きそうになったが、踏ん張って傘を差した。

本当の外出理由は、沢村和樹と出会う為だ。

和樹は会社の二期上の先輩で、春香が思いを寄せる人物である。

実の処、勇気を以て二人きりになった頃合いを確認して、日曜日に食事に行かないかと誘ったのだ。

いやでもその時間帯は、夕食時になるので家族に不審に思われるが、今回の一件でどのような展開になるのかは、神様のみが知る訳だが、咄嗟に弟に着いた嘘が脆くも崩れ去る幼稚な発想であったことを歩きながら後悔している。

それでも、出会いの方が心の中では大きい。

少して気付いたのは、小雨が止んだことだ。傘を畳み、スキップをしながら予定のレストランへと入った。

店員が来たので、待ち合わせを伝える。

奥の席から名前を呼ぶ、声が聞こえた。

沢村和樹、大好きな先輩である。しかし、和樹の方はあまり春香を意識していないのか、どうもデートという感覚ではないのだ。

其の辺りが若干、春香の気持ちを揺るがすが、女は度胸とばかりに、と考えながら席に着き挨拶をした。

「先輩、すいません。待ちました？」

「いや、オレもさつき来たところだよ」

ほっとした気持ちに安堵を確認しながら、お手拭きを持って来た店員に、取り敢えずソーダ水を頼んだ。

コーヒーを口に運びながら、和樹が春香の意図を問い始めた。

「今日、飯に呼んでくれたのは、何か仕事の悩み事？」

ああ、やっぱり、そのような気持ちでしたかと心の中で、自分の魅力があるかどうかという思いに、春香は凹んだ。

でも、ここは堪えて「いや、仕事ではなく、そのかなり個人的なお話をしたくて……」

何気にその意味を理解したのだろう。和樹が先手を取った。

「春香ちゃん、ひよっとして、オレと付き合いたいとか……」

春香の顔が急激に真っ赤になった。凶星という言葉があるが、そこまでの確に答えられてしまうと、恥ずかしさで居た堪れなくなる。

「ちよ、ちよっとお手洗いに！」

慌てて席を立ち、そそくさと駆け出していた。和樹が何かを言ったようだが、耳には入らなかった。

鏡を見て深呼吸をする。まだ顔が赤い。

顔をバシバシと洗い、両ほっぺをパチンと叩いて気合を入れる。

早く席に戻らなくては……

呼吸を整え、ゆっくりと歩き出す。

和樹が春香の姿を視認すると、立ち上がって駆け寄ってくれた。

「大丈夫？気分、悪い？」

ああ、先輩が心配してくれている。

「だ、ただ、大丈夫です！ちよっと緊張したもので……」

そう言いながら席に二人で再び座り直す。

改めて和樹が春香に真剣な眼差しで見つめ、さっきの言葉を繰り返す。

春香はグツと堪えながら、「はい！」と答えたのだ。

その後の会話は正直、あまり覚えていないのだが、和樹の「ありがとう、オレも春香ちゃんの事は前から気になっていたんだ。嬉しいよ」

その言葉が頭の中でリフレインしている状態。

感動の渦がようやくさざ波に変わるころ、和樹がお礼を述べた。

「ありがとうな、春香ちゃん。なんか力が湧いてきたよ」

「い、いえ、こちらこそ、先輩の気持ちを考えずにこ、告白してしまって……」

和樹は笑いながら、「そんなことないよ。あ、ちよっと遅くなってしまったね。送っていくよ」

ちよっと遅くなってしまった……。その言葉が我に返らせた。

慌てて時計を見る。時刻は十時二十六分。げっ！まずい！

携帯にメールも電話も入らないのが、また怖い。

「どうしたの？春香ちゃん？」

「あ、いえ。そのホントに今日は有難う御座いました。先輩とお付き合い出来るなんて夢のようです。今日はこれで帰ります」

少し首を傾げた和樹だったが、ああ！という表情になり、「わかった！気をつけて帰ってね。そうだ！帰ったらメール頂戴。そしたら安心出来るから……」

「はい！必ず」

その場で和樹と別れ家路に向かうが、和樹の視界に入らなくなった途端、猛ダッシュで駆け始めた。

「うわー！スカートが！走りにくい」

街灯の下を焦りの汗を照らしながら、兎に角全力で走る。

どうしよう、携帯で連絡を入れとくか。

怒られる、凄く怒られる。俄かに恐怖感を覚える。

ようやく玄関の前に立つ。息がぜえぜえ言っている。こんなに走ったのは高校時以来かも知れない。

覚悟は決めた。玄関をゆっくりと開ける。

母が出てきておかえりと言う。へ？と思っただが、「御飯は済ませて来たんでしょ」というので、「うん、うん」と答える。

なんだかとても拍子抜けというか、どういうことだろうか。

父も帰ってきている筈だが、飛び出してこない。

ハテナマークが頭をぐるぐる回りながら、二階へと上がっていく。

其処で、高雄が出てきて「なが〜い、本屋での滞在だったね」と嫌みを言われた。

「いやー、それほど…」

高雄はクルリと回りながら、耳を寄せる様に手招きした。

なんだろうか。

「お姉ちゃん、デートだったんでしょ？」とニツと笑って見せた。

ドキツとしたが、どうやら見透かされている。

「い、いや、それは…」

「大丈夫！お父さんとお母さんには、新人さんの歓迎会と説明しといたから」

なんと気の利く弟だろうか。感謝でいっぱいになった。

「高雄、あんたってやつは！泣かせやがるぜ！ねーちゃん感謝だ！」

そして、また一回りしたあと、耳元でPS4のソフトあるから、頼みますね」と言われた。

このガキヤ、いつぺんに感謝の思いが怒りに変換した。

しかし、高雄の機転がなければ、今頃お祭り騒ぎである。

其処はやはり感謝しなくてはいけない。

「判った。なんのゲームソフトが欲しいの？」

「うん、これだけでも…」ま、この際だ、妥協しよう。